

3) 学生代表の発表

ふれあい自然体験活動(小学生班)

発表者 佐藤琴美

私たちフレンドシップ活動事業1は、7/28~30までの3日間、岩手山青年の家で行われた、弘前市子ども会小学生研修会に参加しました。5月から毎月1回、中央公民館に集まり、研修スタッフと一緒にプログラムを作成するための会議にも事前に参加しました。この活動での私たちの役割は、小学生8~9名から成る班の班付き大学生リーダーとして、全部で10班ある班に、それぞれ1人ずつ付き添いました。そして、同じく班付きのリーダーとなっている高校生リーダーと、二人で協力し合って班をまとめたり、自分の班の小学生とプログラムの行動を共にしてふれあい、二泊三日を過ごしました。

行きのバスの中では、みんなで歌を歌ったりしながら行きました。岩手山青年の家に着いてから、まず小学生の前で自己紹介をしました。そして、ゲームを通してお互いを紹介しあいました。続いて班旗を作成しました。出来上がった旗は、すべてのプログラム活動に持ち歩いて、集合の目印に使いました。

二日目は、風船で動物を作ったりしました。外ではネイチャーゲームを行い、虫の名前を当てたり、やの形のものを探したりしました。その後、キャンプファイヤーに使うトーチ棒を作成しました。みんなそれぞれ自分の分を作り、この日の夜に行ったキャンプファイヤーの時に使いました。キャンプファイヤーでは、それぞれの班で劇などの出し物をしました。私たち大学生も、出し物として、歌に合わせて踊りを披露しました。

最終日の別れのつどいでは、じゃんけん列車などのゲームをしたり、ダンスを踊ったりしました。その後、班毎に写真撮影をして、閉会式をして帰りました。

私たちはこのような活動をしながら、小学生と共に三日間過ごしました。子どもとふれあうという意味で、非常にいい経験であったと思います。以上で、フレンドシップ事業1の小学生研修会の発表を終わります。

ふれあい自然体験活動(中学生班)

発表者 今良太

フレンドシップ事業1、岩手県青年自然の家においての、ふれあい自然体験活動中学生班の活動内容の説明を簡単にさせていただきます。

まず、小学生班と大きく異なる点は、学生がスタッフとして活動に参加したことです。なぜこのようになったかと言うと、共にスタッフとして活動に参加して下さった先生方の、子ども達を外から見る目を養ってほしいという思いから、このような形になりました。

まず、岩手山で最初に行ったことは、お互いをよく知ってもらう意味も込めて、ゲームをしました。子ども達も打ち解けてきたところで、次に、班旗作りを行いました。その後、子ども達に、何か手土産を持ち帰ってもらおうということで、ネームプレート作りをしました。それから、キャンプファイヤーで歌う「記念樹」の練習をしました。夕食を挟んで、夜の活動はナイトハイクでした。ここでは、子ども達をびっくりさせようと、大学生がおばけ役に奮闘していました。以上が1日目の活動内容です。

2日目は、班対抗の運動会で幕開けです。ここでは、子ども達が自分の班のために、一生懸命がんばっている姿が印象的でした。昼食を挟み、午後はキャンプファイヤーのためのダンスや歌の練習です。ここでは、高校生の指導力がすごくて、私達も見習う点多々ありました。夕食後、一番の山場であるキャンプファイヤーが行われました。みんなが一体となって、非常に楽しく、印象的なものになりました。これで2日目の活動は終了です。

最終日の3日目。朝の活動は、初日にも行ったネームプレート作りです。初日は自分のネームプレートを作ったのに対し、3日目は友達と交換することを目的としました。やはり3日目ともなると、子ども達も大分打ち解けたようで、中には30枚近く交換している子もいて、とても楽しそうでした。これで3日間の活動がすべて終了です。

私達はこの活動を通して、様々なことを学びました。子ども達への接し方、話し方など、多少ではありますがわかったつもりですし、今後の自分の課題も見つかり、大変有意義な時間であったと思います。そして何より、私達は、子ども達の楽しそうな笑顔が忘れられないことでしょう。今回の活動は、きっとこれから役立っていくと思うので、ここで学んだことを忘れずに勉強し続けたいと思います。以上で、フレンドシップ事業1の中学生研修会の発表を終わります。

フレンドシップ事業2 ふれあい支援活動

発表者 責任教官 豊嶋秋彦

事情があって発表予定の学生が来れませんので、責任教官である私の方から、不登校生徒とのふれあいを通して派遣学生諸君が感じている成長や変容を概括した話をさせていただくこととします。多くの学生さんにこうした話をお伝えできないままに来ておりましたので、発表学生が急に来れなくなったのは、実は私にとってはいい機会になりました。

まず、この事業のアウトラインをお伝えしないとイケません。弘前市の学校適応指導教室に17名の学生が、4月から3月まで1年間、毎日少なくとも2・3人は必ず適応支援者として活動しています。今、年間予定の半分ちょっとまで来たところで、3月までずっと続いていきます。実際どのような活動をやっているのかといいますと、市の学校適応指導教室では勉強の時間もありますし、創作活動をやったり、運動したり、いろんな活動をやっており、それを、指導員の先生が指導する、そういう体制の中に、支援する人として関わっていくわけです。指導員の先生は立派な経歴をお持ちの学校の先生のOBであり、教師的関わりをするわけです。これに対して派遣学生は、教師的関わりというよりも、お兄さんお姉さんの関わりです。教師的関わりは、上下の、教える者と教えられる者とのタテの関係、お兄さんお姉さんの関わりとは、「教える - 教えられる」部分も少しは含みますし、友達関係という横の関係のニュアンスも含む、しかし、横でも縦でもない、一緒に交流しながら、少し支えてあげたり、ちょっとひっぱってあげたりというふうな、「斜めの関係」と言いますが、この「斜めの関係」が入ることによって、子どもたちの動きが活発になることが、多くの機関で確認されていますので、そうした活動を1年間やってもらい、いろんな経験をさせていただこうというねらいがあります。1年間の支援がそもそもの約束ですが、「もっと支援したい」と2年目3年目の支援に入っている人たちもいます。今日発表する予定だった学生は2年目の人で、非常に積極的な関わりをしてくれ、典型的な変容があった人なので、どんな発表になるか楽しみにしてはいたのですが...

では、どういう変化が学生に起きるのか。これを私の方でかなり綿密に調べてきました。まず、不登校の子どもと実際に関わる経験は、学生諸君にはほとんどないわけで、そういう状態のままで、「さあ、不登校の子ども達の支援をするんだ」と入っていきます。もちろん講義で、不登校やカウンセリング的関わりの話は平行してやっていますから、「不登校の子っていうのは、こんな心理的特徴がある、こう関わるとよい」と頭ではわかったつもりだが、実際にはわからないままに入っていき、そこで、「さあ、私に何ができるんだろう」というわけです。今日発表予定だった学生も全く同じことを言っております。

子どもと一緒に遊べばいいんだというのでしたら、あとは遊びの技術、遊びのスキルがあれば、なんとかなります。しかし、いろんな事情で学校に行けない子ども、中には、ノイローゼ状態の子もいます。そこに、授業でカウンセリング的関わりを少しやった位のレ

ベルの学生がボンと入っていくわけで、これは、何をやったらいいかわからない、例えば、子どもがしょぼんとしている時に、どう声をかけていいのかが分からない。このように、自分が適応指導教室でどう動けばいいのかが分からないまま入って行くと、関わりがどうしても消極的になってしまいます。例えば、指導員の先生の関わり方を見て、「こうすればいいのかな」と思いますが、「だけど私にはやれない」、そういう段階がかなり続きます。そうしているうちに、二つのパターンに分かれて行きます。

一つのパターンは、教育実習も近いし、もう教育実習をやっている学生もいるわけで、教師的関わりをしようとする一群の人たちです。要するに、どう動けばいいかわからないのでおずおずとやっているうちに、「ああ、これは学校の先生、家庭教師の先生のようなスタンスで行けばいいんだ」と思って関わっていく一群の人たちがいる。

もう一群の人は、「指導員ではないんだから、教師的関わりではなく、共感的関わりでいかないといけないんじゃないか」と考えます。つまり「教える - 教えられる」関係ではなく、「まず、子どもの気持ちに共感して子どもの気持ちをきちんとおさえよう」としていきます。この人たちがその後どう変化していくかという、「共感的にやればいいんだから子ども達の話を受身的に聞こう」というふうになる。受身的に聞くというのは、自分を抑えながら聞くということで、いんちき共感なんです。フェイクエンパシーと私は言っていますが、自分の率直な気持ちを抑えて子ども達の思いに共感しようとする。ところがそうしているうちに、これは本当の共感ではないことにいずれ気づくのです。「では本当の共感とは？」と試行錯誤しながら関わりを続けていくうちに、自分の率直な気持ちも表しながら、子ども達の率直な気持ちも聴いていくという、いい関係を築いていける人が1年目の後半頃から、少しずつ現れてきます。半年位ではこの状態にはなかなか行きません。1年目の後半から、ようやく、真の共感的関わりが少しずつできるようになってくる。

では、教師的関わりで行こうとした人はどう変わっていくかという、残念ながら、教師的関わりをすると、お兄さんお姉さんの感覚で捉えている子ども達からは、反発、つまり、マイナスの反応が返ってくる。それを見て、「教師的関わりに囚われていたのではないか？」と気づき始め、対応の仕方を変えていきます。お兄さんお姉さんの対応の仕方に変えていくと、子ども達の反応がものすごくいいことに気づく。そして、こちらの人も、共感的関わりが大切なんだと気づくようになるのです。

こうした二つの流れがあるのですが、1年目の終わり頃には、ほとんど全員が共感的関わり的重要性に気づくようになり、その後、またいろんな流れで変わっていきます。

1つは、本当に教育相談的関わりでずっと展開していける人たちが現れてきます。あとは、共感的に関わりながら、子ども達の状態を客観的に見て、- 客観的というのは発達段階をおさえながら、「今はこう関わっていけばいいのかな」というように、教育相談的、共感的に関わるだけではなく、それにプラスして、子どもの心の状態もきちんとおさえながらやっていくというルートで展開していけるようになる。これが、だいたい支援2年目の中ほど頃からはなります。

というのが、今まで私達が把握してきた学生さんの成長の軌跡です。学生本人の言葉でこう変わったと言ってもらったのですが、残念ながらやれませんでしたので、私の方からかなりまとめた形で発表させていただきました。いずれにしても、学生のうちに不登校生徒と関わり、いろんな試行錯誤をしながら、いわゆる教育相談的関わりがやれるようになっていくのが、このフレンドシップ第2事業の非常に重要な意義だと私は考えています。もっと深い分析を既に行っておりまして、それは来年のこのシンポジウムで報告できるかもしれません。

私たち事業3の活動というのは、弘前市立第三大成小学校の1・2年生の子どもたちに、三時間という時間の中で学生が用意したゲームなどを楽しんでもらい、学生と子どもたちがふれあうことを目的としたものです。

学生たちは3つのグループに分かれ、各グループで活動内容を考えました。その活動の中から、子どもたち自身が行きたい所を選び、自由に行き来してもらおうというものです。活動内容については、後程説明致します。

9月25日の当日を迎えるにあたって、学生は二度、第三大成小学校を訪問しました。事前に子どもたちとふれあった方が参考になるのではないかと、学校側の配慮からです。二度目の訪問の際、簡単に当日の活動内容の説明をした後、あらかじめ作成しておいたポスターを校内に貼りました。

活動当日、まず開会式を行いました。開会式では、子どもたちと挨拶をした後、スキップのために手遊びをしました。

次に、グループ活動の説明をします。1つ目のグループは校庭で活動を行いました。このグループでは活動内容として、輪投げ・魚釣りゲーム・動物倒し・ビュンビュンごま・お絵かきコーナーの5つが用意されました。また、このグループでは、輪投げ・魚釣り・動物倒しを点数制にして、黒板に1位の人の名前と点数を記入していました。

2つ目のグループは中庭で活動を行いました。このグループでは、空き缶飛行機・ストラックアウト・ボーリング・飛行機着陸ゲームの4つが用意されました。その中のストラックアウトでは、自分で自分だけのボールを新聞紙で作って、子どもたちにゲームを楽しんでもらいました。

3つ目のグループは体育館で活動を行いました。活動題目は「紙ヒコ - キ祭り」です。これは、簡単に説明すると、子ども自身が紙飛行機を作って遊ぶというものです。紙飛行機と言っても、単に紙を折って作るのではなく、子どもたちが興味・関心を持ってくれるようにクリップや輪ゴムを用いて、より頑丈に飛ぶように工夫しました。子どもたちは作ることに夢中になっていて、創作の喜びを味わっている様子が覗えました。自分で作った飛行機を飛ばして、自分で作った遊具で遊ぶ楽しさを味わっている様子も見られました。子どもたちの中には、遠くまで飛ぶように自分で工夫する子や、記録を重要視する子など、様々な子がいました。

閉会式では、校庭での活動グループによる表彰式がありました。その後、学生と子どもたちのそれぞれからお礼の言葉がありました。最後には、学生と子どもたちが一人ずつ握手をしながら退場し、ふれあいが更に深まった気がします。以上で、事業3の活動報告を終わります。